

Title	「モオルドンの戦」の歌
Sub Title	
Author	厨川, 文夫(Kuriyagawa, Fumio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.31(529)- 72(570)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「モオルドンの戦」の歌

厨川文夫

—

紀元九七九年、England の王位に即いたのは Athelred である。此王の在位三十七年間、England の民は内に王の悪政を忍び、外からは Danes の侵入で脅かされ、まことに Edgar 王の時代（九五九—九七五）とは打つて變り、塗炭の苦痛を嘗めねばならなかつた。Anglo-Saxon Chronicle (MS. Cotton. Tiberius B. ii) の筆者は、九七九年の項に Athelred 王の即位を敘し、その直ぐ後に次の様な不氣味な記事を附け加へてゐる。

「これと同じ年、火に似たる血色の雲屢々現はれぬ。夜半には、最も著しく現はれて、様々なる光の筋の姿となりぬ。夜明けむとするに到りて消え失す。」 (By ilcan gear wees gesewen blodig wolcen on oft sidas on fyres gelicnesse and þæt weas swýþost on middeniht of þywed. and swá on mistlice bearnas wæs

gehiwod. Þonne hit dagian wolde. Þonne toglað hit.)^(註一)

(註一) John Earle and Charles Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, Vol. I, Oxford, 1892, p. 122.

この記事にある様な現象が例へ今日起つたとしても、我々はそれを後世に傳ふべき重要記録書に書き留めるであらうか？ 例へ珍奇な現象としてこれを記録に残すとしても、此年中での最も大なる歴史的 事件として、自國の君主の即位と共に此空の奇現象唯一つを擇び出すであらうか？ MS. Cotton. Tib. B. i. の筆者は、Æthelred 王の即位と、この空の奇現象とのみを紀元九七九年に於て記録の價值あるものと認め、その他の事柄は全く記して居ない。しかも、王の即位の記事は二十九語で盡きてゐるのに對し、この深夜に血の色したる雲が現はれるといふ記述には三十四語を費してゐる。此寫本を書いた Anglo-Saxon 人(恐らく Abingdon の僧侶)^(註二)の心に、この奇怪な現象の話が傳へられた時、深甚な感銘を惹き起したことは推測に難くない。彼は恰も妖怪變化を見たかの如く、此一節を氣味悪い言葉で綴つてゐる。

(註二) A. Brandl, *Geschichte der altenglischen Literatur* (Pauls *Grundriss der germ. Philologie*), I. Teil, Strassburg, 1908, S. 179.

此記事と明かに同一の筆者の筆になる同一寫本の前年(九七八年)の項には Eadward 王が殺害されて、其弟 Æthelred が王國を繼承するといふことが誌されて居る。又別の寫本(MS. Laud 636)^(註三)には九

七九年の項に Eadward 王が殺害されたといふ散文の記述の後に、不規則な韻文で、天帝が彼の仇を報じた、とある。

(註三) Earle-Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, I, p. 123.

この不規則な韻文は長短二十四行よりなるものである。これは、此年代記作者が、人口に膾炙した一篇の ballad か乃至は數篇を採つてこれを分解し、新に語を加へて、もとの規則正しい調子を崩した上で *Chronicle* の記事に織り込んだものであらうと解釋されてゐる。^(註四)

(註四) *The Cambridge History of English Literature*, Vol. I, 1920, pp. 138-139.

斯くの如き ballad を口誦んだ一般民衆は、Eadward 王の殺害に續く Æthelred 王の治世を天帝の怒りを受けた時代と考へたであらう。又 William of Malmesbury (一一四三歿?) の語る所によれば、高僧 Dunstan が Æthelred 王の即位に際して、不吉な豫言をしたといふ。Dunstan は、王の頭上に冠を置き終つてからかう言つた。——「玉座への汝の道を開かむがために流された汝の兄の血は、汝自身と汝の子孫を苦しめ、笏が外國人の國へ移るまでは、劔は、汝の家を訪れることを罷めぬであらう。」(W.

Malmesb. de Gest. Reg. Ang., p. 162; Eadmer, *Vit. Dunst.*, p. 113.)^(註五)

(註五) F. Wright, *Biographia Britannica Literaria: Anglo-Saxon Period*, London, 1843, p. 456.

果して William of Malmesbury の傳ふるが如く、Dunstan が事實をういふ不吉な豫言をしたか否かは

確かめる事が出来ない。然し Eadward の殺害に續く Æthelred の治世が始めから、「血」や「火」で象徴され得るものであつたからこそ、かの Abingdon の僧も、あの「火に似たる血色の雲」(‘blodig wolcen . . . on fyres gelicnesse’) の出現を殊更に取り上げ、これを無氣味な不吉な言葉を以て年代記に書き誌したものはあるまいか？ これと同様の空の現象のことが九七一年前後に書かれた『ブリクリング説教集』(Blickling Homilies, ed. R. Morris, E.E.T.S., p. 91) にもあるが、そこでは最後の審判の日の徴候の一つとして述べられてゐる。——「茲に於て北の方より血の色したる雲立ち上る」(‘Ponne astiges blodig wolcen from nordæle’)。當時、紀元一〇〇〇年には此世の終が來るといふことが一般に信じられてゐた。^(註六)『ブリクリング説教集』を書いた僧は好んで此世の終末の近きを説いて世人を戒めてゐる。彼は説く。——「よつて、此世界の終りが甚だ迫つてゐることは、吾々が今や見ることが出來、知ることが出來、些かの躊躇なく認め得る所である。幾多の危険が現はれた。人の悪しき業と過ちとは甚だしく増した。かくて、我々は人の住む國中遍く怖るべき罰と恐ろしき死とが人々の許へ來たことを日々耳にす」(‘Magon we þonne nu geseon ond oncnawan ond swiþe gearlice ongeotan þæt þisses middangeardes ende swiþe neah is, ond manige freccnessa seteoþwe, ond manna woldæda ond wonessa swiþe gemonigfealdode; ond we fram dæge to oþrum geariaþ ungeeyndelico witu ond ungeeyndelice deaþas geond þeodland to mannum eumene.’)^(註七)

(註六) *Cambridge Hist. of Eng. Lit.*, I. p. 115.

(註七) *Blicking Homilies*, ed. R. Morris, I. p. 119. *Aethric* も九九〇—九九一年に書いた説教集 *Homiliae Catholicae* の序文で、紀元一〇〇〇年の此世界の終りに就いて述べてゐる (H. Sweet, *Selected Homilies of Aethric*, Oxford, 1922, p. 3).

我々は Abingdon の僧の「火に似たる血色の雲」の記述の中に、此世の終りの近づきを想像して不安におびえた、當時の Anglo-Saxon 人の心の一つの現はれを見るのである。單に、夜半赤い雲が現はれたに過ぎない事も、此世界の終りの近づいた徴候なりと信ずれば、重大事件になる。かくて *Aethelred* 王の即位の他には此赤い雲の出現を、紀元九七九年中に起つた最大事件の如くに扱つた理由も肯かれる譯である。

然し、紀元一〇〇〇年の此世の終りを當時の人々にかくまでも深く信せしめ、單なる *Aurora Borealis* の出現にも戦々兢兢たらしめたものが、ヨハネ黙示録の比喻を誤解した神學者連の力ばかりでなかつたことは言ふまでもない。 *Aethelred* 王の呪はれた即位の後、二年ならずして、一時終熄したかに見えた *Danes* の侵入が再び始まつてゐる。九八二年にはロンドンに大火災があつた (*Ang. Sax. Chron.* 及び *Florence of Worcester's Chron.* 同年の項)。九八六年には、王は *Rochester* の町を包圍したがこれを攻略する能はずして *Rochester* の僧正管區地方を荒した (*Ang. Sax. Chron.* 及び *Florence of Worcester's Chron.* 同年の項)。其翌年には熱病が流行し、又家畜の傳染病が前代未聞の勢で *England* 全土に猖獗を

極めた(*Flor. Worc. Chron.*, anno 987)。然し人心を不安のどん底に陥れた最大の原因は、うち續く Danes の侵入であつた。悪政に疲弊した England の民は、北海を渡つて襲來する精悍な異教徒 Danes の前には怯えた羊の群の如く、頑強な抵抗を試むる者は殆どなく、England 全土は彼等の破壊と掠奪に曝された。九九一年には Athelred 王もまた Canterbury の大僧正 Sigere 其他の言を容れて、侵入者等に一萬ポンドを支拂つて和を請ふの愚策に出で (*Ang. Sac. Chron.* anno. 991; 後段参照)、遂にその昔彼等自身の祖先なる Anglo-Saxon 人に征服された Britons の轍を踏むに到つたのである。一〇〇二年から一〇二三年にかけての York の大僧正に Wulfstan (Lupus とも言ふ)といふ者があつた。彼の作つた説教文の中に『エゼルレド王の御代のこと、デイン人等が最も甚しくイギリス人を迫害したるとき、イギリス人に興へたる Lupus の言葉』(*Sermo Lupi ad Anglos quando Dani maxime persecuti sunt eos, quod fuit in dies [sic] Athelredi regis*) といふものが今日傳はつてゐる。^(註八)一〇一四年の作であるが、それまで Danes の侵入によつて惹起された國內の紊亂した状態を如實に描いて餘す所がない。

(註八) *Wulfstan. Sammlung der ihm zugeschriebenen Homilien nebst Untersuchungen über ihre Echtheit*, Hrsg. von A. Napier. 1. Abt., Berlin, 1883, S. 156-167; H. Sweet, *An Anglo-Saxon Reader*, Oxford, 1922, pp. 87-97. マネン語の標題は寫本 (Hatton MS.) のものによる。

火災や疫病や戦や饑饉と共に、不信仰、裏切、姦淫、誹謗、近親の闘争等、醜い道德頹廢の様が、烈

々たる悲憤の言葉を以て綴られてゐる中で、茲に我々が特に注目したいのは、此時代のイギリスの武士や王や貴族がデイン人の襲來に直面して如何なる態度を示したかを述べてゐる部分である。「今や永らく内にも外にも何等よき事とはなく、凡ゆる方面に戦と迫害、繁く頻りに起りぬ。而して今や永らくイギリス人は全く勝を得しことなし。神の怒りによりて甚だしく意氣を挫かれ、而も海賊等 (Danes を指す) は神の賛同によりて甚だしく強きため、屢々戦に際し一人 (のデイン人) よく十人 (のイギリス人) を敗走せしむることあり、時にはそれよりも少く、時にはそれより多きことあり。遍へに、我等 (イギリス人) の罪業によりてなり。」 (‘Ne dohte hit nu lange inne ne ute, ac waes here and hete on

gewelhwilcum ende oft and gelome, and Engle nu lange eall sigelase, and to swyðe geyrgde purh Godes yre, and fotmenn swa strange purh Godes Gefatunge þæt oft on gefeohte an feseð tyne, and hwilum læs, hwilum ma, eall for urum synnum’, ed. Sweet, p. 93.) 又次の一節は、デイン人に金を拂つて和を請ふたことを諷してゐるものと考へられる。——「然れども我等が屢々被る此の悔りに報ゆるに、我等は我等を辱しむる者に對する尊敬を以てす。我等は常に彼等に支拂ひをなし、彼等は日々我等に辱しめを與ふ。彼等は破壊し、焼き、掠奪し、押收して船へ運ぶ。嗚呼、凡べてこれ等の災の中にあるもの此國民に對する神の明かにして眼に見ゆる怒りにあらずして何ぞや?」 (‘Ac ealne þeene bysmor þe we oft poliað we gyldað mid weorðscype þam þe us scendað : we him gyldað singallice, and by us hynað

deaghwanlice. Hy hergiað and hy bernað, rypað and reafað, and to scipe leadað ; and la hwæt is ænig ofer on eallum þam gelimpum butan Godes yrre ofer þas þeode swutol and gesene ?' ed. Sweet, pp. 93-94.)

Wulfstan の言ふ所が、事實であつたことは、*Anglo-Saxon Chronicle*, anno. 992 ; 994 ; 998 ; 999 ; 1003 ; 1006 ; 1007 等の項を見たゞけでも明かである。然し少數よく多勢の Danes を向ふに廻して怯まず敢然戦つて屢々これを撃退した Ælfred 大王時代のイギリス人の氣魄を傳へた武士が、Æthelred 王の時代には最早全くなかつたのであらうか。Beowulf & The Fight at Finnsburg 等の古い Anglo-Saxon の敘事詩、更に溯つては Tacitus の書卷に現はれたやうな、Germania の英雄の理想は、此時代のイギリス人の中には既に滅び亡せて、異教の Danes の間にのみ生き残つてゐたのであらうか。

(註九) F. Kuriyagawa, "Beowulf and the Fight at Finnsburg" (*English Literature and Philology*, III), Tokyo, 1932.

(註十) *Germania*, 14.

ところが、この不安な末世の空氣を呼吸した Æthelred 王の時代のイギリスに於ても、なほ古代 Germania の英雄の精神は、全く滅び亡せては居なかつたのである。紀元九九一年、Maldon に於ける Danes との戦を語つた一篇の史詩がある。其事件直後の作と考へらるゝものであるが、此詩によつて我々

は、古代 Germanica の精神の傳統が未だ消え失せず一部に脈々として存在し、強烈な

力を以て周囲の怯懦な空氣に反撥したことを知るのである。『モオルドンの戦』(The Battle of Maldon) 或は此詩の中心人物の名に因り『ビュルトノオスの死』(The Death of Byrhtnoth) と稱せらるる詩(註十一)が即ちこれである。

(註十一) *Anglo-Saxon Chronicle* にせ 'Danes'(OE, 'Dene')と 'Northmen'(OE, 'Northmenn')とを區別してゐる。例へば七八七年の項には次の記事がある。「この年 Brihtic 王は Offa の娘 Eadburg を娶りぬ。而して彼の時代に Herehaland よりはじめて Northmen の (OE, 'Northmanna') 船三隻來りぬ。こは 'Dane 人の (OE, 'Deniscra manna') 船の中 England を訪ねし最初の *þe ða sæþ*」(Her Brihtic cing nam Offan dohter Eadburge to wine, and on his dagan coman aerost .iii. scipa Northmanna of Hereþa lande. Ðæt weran þa aerostan scipa Deniscra manna þe Angelcynnes land gesohton.' MS. Cotton. Domitian A. viii. ed. Earle-Plummer, p. 54). 紀元九九一年 Maldon に襲來したのは Norway の軍勢でもしたと信すべき根據がある。後段(一二頁以下)参照。

(註十二) 原詩には、他の大多數の OE. (= Old English) の詩と同様、標題は附してゐない。J. J. Conybeare は *Illustrations of Anglo-Saxon Poetry* (London, 1826), pp. lxxxvi-xcvi に於て此詩を 'The Death of Byrhtnoth' と名附けた。以後ドイツの學者には此名稱を用ふる者が多く ('Byrhtnoth's Tod', etc. 例へば Grein, Wülker, Etmüller, Kluge, Rieger, 其他)。然し英米の學者は一般に茲に私が標題に使つた名稱を呼んで居る (Sweet, Bright, Sedgfield, Ashdown, 其他)。

二

Humphrey Wanley は、千七百五十年に Oxford から出版された古寫本の書誌(註十三)の中 (p. 232) に、Sir

「モオルドンの戦」の歌 (厨川)

(註十三)

三六

Robert Cotton (1570-1631) の藏書中にある寫本、'Otho A. XII.' と番號をつけられた四つ折判の羊皮紙の codex を記述し、其内容を簡単に述べてゐる。——

MS. Otho A. XII. Cod. memb. et antiquus in Quarto, in quo, post illud Asserii Menevensis exemplar, quo usus est Dr. Matthæus Parker Archiep. Cant. statim sequuntur Saxonice I. Exorcismus contra Melancholiam. II. Exorcismus Prolixior contra frigora et febres. III. Fragmentum capite et caele mutilum, sex foliis constans, quo Poetice et Stylo Cædmoniano celebratur virtus bellica Beorhnothi Faldormanni Offæ et aliorum Anglo-Saxonum, in prelio cum Danis. (寫本 Otho A. XII. 四つ折判の羊皮紙の古き codex. その中にカンタベリの大僧正 Matthew Parker 博士の用ひたる、かの Asserius Menevensis の寫し(註二)の直ぐ後に、サクソン語「古代英語の意、——譯者」で次のものが續いてゐる。一、憂鬱に對する魔祓ひの呪文。二、寒氣と熱とに對する一層長き呪文。三、初めと終りとの缺けた斷片、六葉〔六枚〕が残つて居り、この中に Danes との戦に於ける大守 Beorhnoth [= Byrhtnoþ], Offa, 及び其他の Anglo-Saxon 人等の武勇が、詩として Cædmon の文體で讚へられてゐる。)

(註一) *Antiquæ literaturæ septentrionalis liber alter, seu Humphredii Wanleii librorum vet. septentrionalium, qui in Angliæ bibliothecis extant, ... catalogus historico-criticus* (Vol. iii of George Hickes's *Thesaurus*), Oxoniæ, 1705.

(註二) このサクソン文は R. Wilker, *Grundriss zur Geschichte der angelsächsischen Literatur*, Leipzig, 1885, S. 335 に轉載されたものである。

(註三) 千五百七十四年、Matthew Parker がロンドンで出版した Asser 作のアルフレッド大王の傳記、*Aethelred Regis Res Gestis* は此寫本 (MS. Otho. A. XII) の text を用ひたるもの (L. C. Jane, *Asser's Life of King Alfred*, London, 1926, p. li)。

この(三)に「Danes との戦に於ける大守 Beorhnoth, Ofa, 及び其他の Anglo-Saxon 人等の武勇が、詩として Caedmon の文體で讚へられてゐる」とある、始めと終りとの缺けた六葉の斷片こそ、茲に *The Battle of Maldon* として扱ふ詩の原寫本のことなのであるが、この寫本 (Cotton. Otho. A. XII.) は、千七百三十一年、Sir Robert Cotton の書庫に起つた火災で灰燼に歸してしまつた。Anglo-Saxon 時代の末期、Aethelred の時代に僅かに残つた Germania の英雄精神を今日に傳へる此貴重な文獻は、若しもかの詩人 Alexander Pope が諷刺詩 *The Dunciad* (III, 185 行) で辛辣な罵倒を浴せた有名な考古家 Thomas Hearne (1678-1735) ^(註四) の力がなかつたならば、今日我々は唯、Wanley の書誌等によつてその會の存在を知るばかりとなつたことであらう。

To future ages may thy dulness last,

As thou preserv'st the dulness of the past!

—A. Pope, *The Dunciad*, III, 189.

Hearne は、Cotton 書庫の火災に先立つこと五年、千七百二十六年 Oxford で出版した John of Glastonbury の年代記の附録中に、*The Battle of Maldon* の詩を轉寫したものを附け加へて置いた。^(註五) 今日で

はこれが此詩の text の唯一の根據となつてゐる。

- (註四) Pope 氏 Hearne のルビを 'Wormius' と誤植したる事 (III, 188)。引用の句は 'Globe Edition の text (p. 398) に於て'。
- (註五) Wanley の書誌ハス九年版 'Thomas Smith 氏『Cotton 書庫寫本目錄』(Catalogus Librorum Manuscriptorum Bibliothecae Cottonianae, 1696) の中ハ 'MS. Otho A. XII. の第三の項目を「ヘンリックス等に關する或る歴史の斷片。サットン語に。」 ('Fragmentum quoddam Historicum de Eadrico, etc., Saxonice') と記して居る (M. Ashdown, *English and Norse Documents*, Cambridge, 1930, p. 4)。又「ヘンリックス」と言つて居るのは 'Maldon の詩の始めの部分(第十一行)に出づ來る Eadric と云ふ人名を見て書いたものに違ひないが、此詩の解題としては非常に不完全で、これでは全くそのおもかげが分らない。
- (註六) *Johannis Glastoniensis Chronica sive Historia de Rebus Glastoniensibus*. Ed. Th. Hearnius, 2 vols. Oxonii, 1726, pp. 570-577. (R. Wilker, *op. cit.*, S. 334.)

扱、我々は此處でこの詩の寫本から眼を轉じ、再び Ethelred 王時代の England へ戻つて、この詩に描かれた事件を語らねばならぬ。

紀元九九一年、古代 Norway の王者の中の最も偉大なる王として北歐の詩に sagas に其輝く業績を謳はれた Olaf Trygvason (在位、九九五—一〇〇〇)^(註七) は船隊を率ゐて England の海濱に押寄せた。

Anglo-Saxon Chronicle の筆者は次の様に述べてゐる。——

An. DCCCCXCI. Hér waes Gypteswic gehergod, and eafter þam swiðe raðe waes Brihtnoð ealdorman ofslegen æt Mældune. and on þam gearre man geredde þæt man geald ærest gafol Deniscan mannum. for

þam micclan brogan þe hi worhtan be þam seeriman. Þæt wæs ærest .x. þusend punda. Þæne ræd ge-
rædde ærest Syric arceþiceop. (註八)

(九九一年。この年 Gyppeswic [≡ Ipswich] は掠奪せられ、而て其後まことに幾何もなく Meldun [≡ Maldon] にて大守 Brihtnoð は殺害せられたりき。而てこの年 Dane 人等に、彼等が海邊にてなしける大いなる恐ろしき業の故に、最初の貢を支拂ふことと定めぬ。これはその初め一萬磅なりき。此提言は最初大僧正 Syric [≡ Canterbury の大僧正 Sigeric] がなしけるものなり。)

これは MS. E (Laud, 636) の記事である。その他の MSS. も、MS. A 以外のものは盡く Maldon の戦を九九一年の項に置いて居る。所が MS. A (The Parker MS. O. O. C. 173) のみは唯獨り、九九三年の項にこれを置き、其上 Unlaf (≡ Olaf Tryggvason) が三百九十隻の船を率ゐて來り、Maldon の戦に勝利を得た後、Æthelred 王が、彼を僧正の手によつて迎へたと記してゐる。(註九)

993. Her on ðissum gearre com Unlaf mid þrim and hundnigontigon scipum to Stane, and forherge-
don þæt on ytan, and for þa ðanon to Sandwíc, and swa ðanon to Gipeswíc, and þæt eall ofereode,
and swa to Mældune, and him ðær com togeanes Bryhtnoð ealdorman mid his fyrde, and him wið ge-
feht, and hy þone ealdorman þær ofslogon, and wælstowe gewæld ahtan. And him man nam syððan
fríð wið, and hine nam se cing syððan to bisceopes handa, [þurh Sirices lare Cantware biscepes, and

Ælfages Wincestre bisecepes]. ^(註七)

(九九三。この年 Unlaf, 三百九十隻の船を率ゐて Stan [「Folkestone」] へ來り、外にてこれを劫掠しぬ。而してそれより Sandwich へ赴きぬ。かくてそれより Ipswich へ赴きて盡くこれを蹂躪し、かくて Maldon へ進みぬ。此地にて、大守 Byrhtnoth 己が軍勢を率ゐて彼等に向ひ來り、これと戦ひき。茲に於て彼等この大守を斃し、戦場の支配を得ぬ[「勝利を得たり」といふ意の常套的表現]。この後彼 Unlaf] と和が結ばれ、(Canterbury の僧正 Sigeric と Winchester の僧正 Ælfheah との指金さしなまによりて) 王は彼を僧正の手によりて迎へぬ。^(註十))

(註八) Olaf Tryggvason と關する古代 Norway の文獻には、『オオラフ・トリヒツグヴァソンの譚』*Ólafs Saga Tryggvasonar*

(*Formannasögur*, III) cc. 285-286 ; 『諾威諸王の譚の要略』(*Ágríp af Noregs Konunga sögum*), cc. 13-19 ; 『オオラフの譚』(*Ólafs Saga Helga*), cc. 20-24 ; 『オオラフに對する挽歌』(*Ólafsháttur*) ; 『基督教譚』(*Kristni Saga*), c. 5 等がある。

(註九) Earle-Plummer, *Two Saxon Chron. Parallel*, I, p. 127.

(註十) Æthelred 王が教父となりて Olaf が堅信禮を受けたと言ふ意である。Earle-Plummer, *op. cit.*, II, p. 178 ; M. Ashdown,

English and Norse Documents, p. 95.

(註十一) Earle-Plummer, *op. cit.*, I, p. 126.

斯の如く、MS. A のみが Maldon の戦を九九三年の項に置き、而も他の MSS. に於ける Maldon の戦の記述には現はれて居ない。(一) Unlaf [Olaf] の名を擧げ、(二) 彼が三百九十隻の船を率ゐて來たこと、

(三)後に Æthelred 王が教父となつて Olaf が堅信禮を受けたこと、(四) Ipswich を攻略する前に Folkestone と Sandwich とを次々に襲つたこと、が這入つて居る。この MS. A には九九一年の項が缺けてゐる。他の MSS. には九九一年の項に Maldon の戦があり、そして右に擧げた(一)、(二)、(三)は九九四年の項に記載されてゐる。そこで MS. A の九九三年の記事は、他の MSS. の九九一年と九九四年とに正しく區別して記された二度の別な侵寇を混同したものと考へられる。かくて Maldon の戦の年代に就ては、MS. A. よりも他の MSS. に據つて、之を九九一年とする方が妥當だといふことになる。又 Maldon の戦で斃れた大守 (ealdorman) Byrhtnoð の署名が九九〇年以後の charters に全然現はれないといふことも、九九一年が正しいことを立證するものであらう。^(註十一) 然しこの九九一年の侵寇にも Olaf Trygvason が指揮者であつたことは、其年の平和約定文の序言を見れば明かである。――

Dis synd ða friðmal 7 ða forword, ðe Æthelred cyng 7 ealle his witan wið ðone here gedon habbað, ðe Anlaf 7 Justin 7 Guðmund Stegitan sunu mid wæron. ^(註十二) (この Æthelred 王と彼の顧問官總つとが、Anlaf [=Olaf] と Justin [=Jósteinn] と Stegita の子 Guðmund とが共にありし^(註十三) [Northmen の] 軍勢と結びし平和の條款と協定なり。)

(註十一) Byrhtnoð の署名した charters は九五六年から九九〇年に亘つて居り、'Ego Byrhtnoth dux' と自分の肩書を 'dux' としてゐる。たゞ九五六年、九月二十九日 Eadwig 王が 'Beorhtnoð' [Byrhtnoð] と Tadmarton の土地を授へる場合の char-

ter (ed. Birch, III, p. 152) には 'princeps' の稱號と呼ばれてゐる。 Cf. Walter de Gray Birch, *Curtularium Saxoniarum*, Vol. III, London, 1893; M. Ashdown, *English and Norse Documents*, p. 275.

(註十二) この平和約定文の全文は F. Liebermann, *Die Gesetze der Angelsachsen*, I. Bd., Halle, 1903, S. 220-224 である。 Liebermann はこれを九九一年に置いてゐる。引用の text も Liebermann, *op. cit.*, S. 220 に據つた。これは 'and' の略字である。

(註十三) *Florence of Worcester's Chronicle*, anno 991 には、此年の入寇の指揮者は「Justin と Steita の子 Guthmund」(Justin et Guthmund filius Steitan) であると述べてゐる。

紀元九九一年、Olaf Tryggvason を始め、Justin と Guthmund の率ゐる諾威の海兵等は、Ipswich を劫掠した後、Essex の Maldon へ進んだ。これを邀へ撃つたのが ealdorman Byrhtnoth である。然し戦利あらずして Byrhtnoth は敢なくも斃れ、この年 Ethelred 王は、Canterbury の大僧正 Sigeric の提言により、Olaf 等に大金を支拂つて和を請ふに到つた。*Anglo-Saxon Chronicle* はこの金額を一萬ポンドとして居るが、其年の平和約定文によればそれより遙かに多く、金銀併せて二萬二千ポンドに達してゐる。

(註十四) F. Liebermann, *op. cit.*, S. 224.

以上は比較的最も信頼するに足る資料が我々に傳へた Maldon の戦のアウトラインである。このほかに Maldon の戦の數年後に書かれた『聖オズワルド傳』(Vita Sancti Oswaldi) (註十五) があるが、この中に

Byrhtnothus [Byrhtnoth] が右手を以て「己が頭の白鳥の如き白髪を沾れて」(non reminiscens cigne-

am carnem sui corporis) 敵を打ちまくり、左手を以て「己が身の弱きを忘れて」(debilitationem oblitus sui corporis) 自分を禦いだとあるので、此戦の時、Byrhtnoþが非常に老齡であつたことが分る。この後あとに「Byrhtnoþは倒れ、殘餘の者等は逃れぬ」(Byrhtnothus cecidit et reliqui fugerunt) と言つてゐるから、『聖オズワルド傳』の作者は、『The Battle of Maldon』の詩を知らなかつたらしい。詩の方ではByrhtnoþの倒れた後も、逃れた者は少數で、大多數の忠實勇敢な部下達は、逃れた者を罵り、主君の仇を報ひよと互に勵ましつゝ奮戦し、一人一人相次で倒れてゆく。

(註十五) *Vita Sancti Oswaldi* (*Historians of Church of York*, ed. J. Raine, I, pp. 399-475), p. 456.

其他に『Ramsey 史』(*Historia Ramesiensis*, cap. LXXI: "De Brihtno Comite") と『Ely 教會史』(*Historia ecclesie Eliensis*, Lib. II, cap. VI) があつて、Byrhtnoþの最後の戦と、その戦へ赴く途上、Ramsey と Ely を通過したと述べ、その時の事を語つてゐる。然しこれ等は孰れも恐らく十二世紀の中間葉以後に書かれたものであつて、當になる資料ではない。(註十六)

(註十六) W. J. Sedgefield, *The Battle of Maldon*, Boston, n. d., p. xii; E. A. Freeman, *The History of the Norman Conquest of England*, I, Oxford, 1870, p. 624 ち、Brihtnoth が自分の所領から Maldon へ行く途中 Ramsey と Ely を通過するところ様などは考へ難い、『Ely 教會史』はこの難點を避けむがために Brihtnoth を East-Saxons の Earl とせよ Northumbrians の Earl とし Maldon の戦を二度おいたこととせよ。一度目は Brihtnoth が勝つ Northumberland へ歸る、再ち Danes が上陸する Brihtnoth は Northumberland から戻つて来るが、途上 Ramsey と Ely との僧院を訪れる。二度目

の戦には「十四日間」の戦闘の後、殺される。「エリとラムジの歴史にある、ブリヒトノスの話は可成作り話が混つてゐるらしい」(“The accounts of Brithnoth in the Histories of Ely and Ramsey seem to be mixed up with a good deal of fable”)と Freeman は言つて居る。

前述のアウトラインを補ひ、*Byrhtnoth* と其部下の大部分の者等が如何に祖國と主君とのために雄々しく戦つたか、如何に悲壯な最後を遂げたかを最も如實に我々に語るものは、*The Battle of Maldon* の詩以外にはないのである。Max Rieger は、此詩の作者が敵軍の者の名、その指揮者 *Olaf* の名を挙げ得ず、且つイギリス軍側から觀察し得ることの他は言つて居ないといふことを指摘し、この詩は、*Maldon* の戦の直後に作られたものであると斷言した(*Alt- und angelsächsisches Lesebuch*, Giessen, 1861, S. XIII-XIV)。Henry Sweet (*An Anglo-Saxon Reader*, Oxford, 1922, p. 120) & Ten Brink (*Geschichte der englischen Litteratur*, Bd. I., Berlin, 1877, S. 118, 122) も Rieger と同説である。一方此詩の第二八七行に現れる「*Gadde* の血族」(“*Gaddes mæg*”)を敵の一人と見て、Rieger の挙げた理由には反對の説をなす學者もある(K. Körner, *Einführung in das Studium des Angelsächsischen*, Heilbronn, 1880, S. 72-88; U. Zernial, *Das Lied von Byrhtnoth's Fall* 991, Berlin, 1882, S. 12)。又現存する此詩は頭初と最後との部分が缺けてゐるので、Rieger の説を當にならぬとする者もある(Earle-Plummer, *op. cit.*, ii, p. 175)。然し Rieger の説は扱置くとしても、兎に角この詩は、*Byrhtnoth* と部下等の悲壯な戦

死が未だ人の記憶に生々しく残つて居り、それを知る人々の心に未だ深い感動が消えやらぬ時に書かれたものに違ひない。これは、キリスト教に關係がなく、且つ政治的見地からすれば Brunanburh の戦よりも遙かに重要でない此事件を事更に題材として、此のやうな長篇(註十七)をもした動機を考へても推測され得ることであり、又此詩の生彩ある描寫からも感じ得る所である。更に又此詩の言語の特徴を調べて見ても(註十八)此推定に矛盾するものは全く見當らない。

(註十七) *Anglo-Saxon Chronicle*, 九三七年の項に、イギリス王 *Ræthelstan* が *Brunanburh* と *Danes* の *H Anlaf* (*Olaf Trygvason* とは別人) と戦つて勝利を得た華々しい國家的事件を詩に書いてある。これは *alliterative long line* にして十三行の長さである。*Anglo-Saxon Chronicle* 含まれた其他の史詩では九七五年の項にあるもの(三十七行)が最も長い。これに對し *The Battle of Maldon* は、頭初と終りとが缺けてゐるにも拘らず、現存する部分のみでも三百二十五行になる。

(註十八) 拙稿『*The Battle of Maldon* の言語に就いて』(廣島文理科大学英語英文學研究室編輯「英語英文學論叢」第六號、六四一七五頁)

従つて此詩の中の、戦の主要な事實と人物の名とは作者の創作したものでなく、實際あつたものとしてよいと思ふ。「よしやこれより一世紀か二世紀後のラテン語の年代記中にそれ等が見出されるとしても、それよりも遙かに信を置くに足る」(“Much more so [i. e. ‘trustworthy’] than if they were found in a Latin prose chronicle a century or two later”) と E. A. Freeman (*The Hist. of the Norm. Cong.*, I, p. 268, n. 4) は言つてゐる。たゞし此詩の中の人物の言葉遣ひは、作者の創作したものであ

ることば語ふもどもなら。

三

茲に *The Battle of Maldon* の拙譯を掲げる。此詩の寫本は前にも述べた如く、千七百三十一年に焼失してしまつたものと寫し (Hearne の各の頭字をとりて) 通例 H. として現はす) が唯一種現存するに過ぎない。従つて個々の edition の間に見られる text の相違は、全く各 editor 自身の補足と改訂とに因るもののみで、此等はまことに僅少である。斯の如き場合筆者は、editions を對比考査して就中最も適當と認めたる reading に據つて譯すことにした。譯文は努めて意譯を避け、能く限り原文に忠實ならんことを期した。

Editions:—C. W. M. Grein und R. P. Wülcker, *Bibliothek der angelsächsischen Poesie*, Bd. I., Kassel, 1883, S. 358-373; F. Kluge, *Angelsächsisches Lesebuch*, 4. Aufl., Halle, 1915, S. 122-129; M. Rieger, *Alt- und angelsächsisches Lesebuch*, Gies-sen, 1861, S. 84-94; K. Körner, *Einführung in das Studium des Angelsächsischen*, 2. Teil: Texte, Heilbronn, 1880, S. 72-88; M. Ashdown, *English and Norse Documents*, Cambridge, 1930, pp. 22-36; H. Sweet, *An Anglo-Saxon Reader*, 9th ed., Oxford, 1922, pp. 120-130; J. W. Bright, *An Anglo-Saxon Reader*, 3rd ed., New York, 1894.

* * * * *

譯中、() を用ひて包んだ言葉は、譯文の意味の補足であるから、讀者には譯に含めて讀んで載いて差支ないものである。「」に入れた言葉は譯文の説明であるから、譯とは別に於て讀んで頂きたい。例。l. 64:—其處にて軍勢は、水のため、他〔相手方〕の許へ(行く)能はざりき。(Ne mihte þær for wætere werod to þam oðrum.)

(ll. 1-16.) ……は破られたり。^(註) 茲に於て (彼 [Byrhtnoð] は) 武士等の各々に馬を棄て、遠くへ逐ひ

遣り、而して前進し双手と猛き心とに頼れと命じ給ひぬ。爰に於て Ofa の血族(註二)は殿 [Byrhtnoth] が懶惰の振舞を許すまじと思ひ給へることに先づ心附きぬ。かくて彼は、己が手より、愛いとくしみたる鷹(註三)を森の方へ飛ばしめ、戦へと歩みを進めぬ。これによりて人は、この若者が、武器を執りしからには戦にて怖氣づくことなからむと思ひしことを認め得たるなり。彼のほか、Eadric も己が主君、殿を戦に力添へし奉らむと思ひき。茲に、戦へと槍を携へて進みぬ。彼は双手もて楯と幅廣き劔とを握り得し間はゆるがざる心を持ちてありき。彼は己が主君の御前に戦ふべき時に當りて誇らかなる言葉〔誓〕を行ひ果しけるなり。

(II. 17-24.) 爰に於て Byrhtnoth は人々を勵まし始めぬ。馬に跨りて助言を與へ、武士等に如何に彼等が立ちて其位置を保つべきかを指示さしめし、而して己が楯を手もて確と真直に保ち、ゆめ怖れざることを求めぬ。とくと其隊を勵まし了へて後、彼は己に最も好ましき處、彼が己が家臣を最も忠誠なりと知りたる場處、人々の間に下り立ちぬ。

(II. 25-28.) 時に水際みぎわには、海賊の使者立ちて烈しく呼びかけ、言葉もてもの言ひぬ。彼は、彼 [Byrhtnoth] が岸邊に立ちし時、傲然とこの領主に向ひて船人等の言傳をば告げぬ。

(II. 29-41.) 「我をば猛き船人らは汝の許へ遣し、汝に斯く言へと命じたり。——汝は速かに(身の)安泰と引換に寶環を送らざるべからず。而して汝等は貢もてこの攻撃を贖ひ避けたらむ方が、斯くも強

き我等戰を（汝等に）加へむよりは、汝等がためなるべし。もしも汝等そを果し得ば、我等は互に殺し合ふの要なし。我等は黄金と引換へに平和を結ばむと望むなり。此地にて最も富みたる汝が、若し民をあがなひ、船人等に彼等自らの思ひのまゝに平和と引換へに財物を與へ、我等より和を得むと望むならば、我等はその貢物もちて船へ行き、海上へ赴き、汝等と和を保たむと望むなり。」

(II. 42-55.) Byrhtno³ は申しき、楯を握り、か細き槍をしごき、怒に燃えて心きつと言葉もて語りぬ、彼に應答を返しけり。「海賊よ。汝は此軍勢が何を言へるかを聞きたるや？ 彼等は貢として汝等に槍、毒附けたる槍鏑と古き劍、戰にて汝等には役立つたる武具を與へむと望むなり。海賊共の使者よ、戻りて告げよ、此處には此國、*Byrhtno³* の國、我が主君の民と土地とを護らむとする譽高き太守が彼の軍勢と共に立てりてふ大いに忌はしき報せを汝等の國人に語れ。邪宗の者らは戰に倒るべきなり。」

(II. 55^b-61.) 汝等かくも遠く此處まで我等が祖國の中へ入り込み來りしからには、汝等戰を挑まるゝこともなく我等の貢物もちて船へ行くてふことは餘りにも面目なきこと、思はる。汝等にはさまで易々と寶を贏ち得させまじ。我等貢を拂はむより前に槍先と刃、烈しき戰先づ我等が仲を治めざるべからず。(註五)

(II. 62-67.) 茲に於て（彼 [Byrhtno³] は）人々に楯を帯びて行けと申しぬ。されば彼等盡く岸邊に立ちにけり。其處にて軍勢は、水のため、他「相手方」の許へ（行く）能はざりき。干潮の後、上汐滔々として其處へ來りぬ。潮の流は相會ひぬ。彼等が一同槍を持ちゆく時までは、彼等には餘りにも長く

思はれしなりき。

(II. 68-78.) 彼等 Eastseaxe [Essex の人々] の精銳と海賊の軍勢とは陣列整へて其處に Pante の流(註四)れを圍みぬ。たゞ人が箭の飛來のために死を得ることを除きては、彼等の中何者も他を傷くること能はざりき。潮は出で去りぬ。かの船人ら、戰に餓えたる海賊ら許多あまたは支度整へて立てりき。爰に於て、武士等を護り給ふ君 [Byrhtnoþ] は、勇猛なる武士にかの橋を守ることを命じ給ひき。彼は Wulfstan と呼ばれ、その一族中の豪の者なりき。そは Geola の子、己が槍もて、かの橋の上へ大膽不敵にも進み出でたる最初の男を射殺しける者なり。

(II. 79-83.) 其處には怖れを知らざる武者、雄々しき二人 Ælfhere と Maccus, Wulfstan と共に立ちてありき。彼等は淺瀬のほとりにて逃亡なさむことなど思はず、否彼等武器を振ひ得し間ぢう、毅然として敵あだに向ひて身を防ぎけり。

(II. 84-88.) 彼等 [海賊等] 其處にて手強こほき橋の守り手に出會ひしことを認めとくと見し時、忌はしき敵あだ共は爰に於て奸計を廻らし始めつ。(橋上に)登ること、その淺瀬を渡り、軍勢を率ゐゆくことを許されむことを求めつ。

(II. 89-95.) 爰に於て太守は、己がうけばりたる心の故に餘りに多くの土地を忌はしき國人に譲り始め給ひけり。Byrnhelm の子 [Byrhtnoþ] は、爰に冷き水の彼方へ呼ばはり始め給ひつ。「いざ、汝等

に道は開かれしぞ。武士共速かに我らが許へ戦に來れ。何人この戰場を我物顔になし得むかは神のみぞ知り給ふ。」

(II. 96-107.) 爰に於てかの殺戮の狼共、海賊の大群は——水をものともせざりしなり——Panteを越えて西へ涉りぬ。船乗らは楯を陸へ運びき。しなの楯を運びけり。Byrhtno^zは勇士らと共に其處に敵共に向ひ備へ整へて立てりき。彼 [Byrhtno^z] は、楯もて障壁を作り敵共に向ひ確と軍を護れ、と命じぬ。かくて戦、いくさの響は近づけり。定命盡きたる人々の斃るべき時は來りにけるなり。其處に叫聲は擧げられ、鴉、腐肉に餓えたる鷲は廻り翔りつ。地上には叫喚ありき。

(II. 108-121.) 爰に於て彼等は手より鑢の如く硬き槍、磨ぎすましたる槍を翔ばしめぬ。弓は忙しかりき。楯は槍を受けつ。この攻撃は激しかりき、孰れの側にも人々は倒れぬ。若者らは横たはりぬ。

Byrhtno^zの血族、Wulfmer は傷けられて殺戮の床を擇びき。彼 [Byrhtno^z] の姉妹の子なる彼 [Wulfmer] は、劔もて甚しく斬り下げられしなり。その時海賊等に返報與へられき。我が聞きたる處によれば、Badward は己が劔もて一人の者を甚しく斬りつけぬ。打撃を罷めざりき。されば彼の足下に瀕死の武者は倒れつ。この故に彼の主君 [Byrhtno^z] は、機を得し時この近侍に謝言を述べ給ひけり。

(II. 122-126.) かくの如く、猛き武士らは戦に持場を守りき。何人ぞ眞先に其處にて運盡きたる者共の命を奪ひてむかと武器もてる武士らは意氣込みて思ひき。屍は地に倒れつ。

(II. 127-142.) (人々)しかと立ちてけり。Byrhtno^{ex}は彼等を勵まし、武者ら何れも Dene [Daness]^(註十四)にあたりて譽をかち得むと思はむ者は戦に心せよと命じぬ。

時に戦に剛つよき者〔海賊の一人〕進み來りつ。禦ぎのために武器、楯もたげて、この人に向ひ歩み來りけり。劣らず心きつと太守もこの賤しき者に向ひて進み給ひき。彼ら孰れも他に對し禍を念じたりき。聽てその船人は南國(註七)(渡來)の槍を送りつ。されば武士等の主君は傷き給ひにけり。彼、楯もて押し給へば、その柄は折れ、槍は碎け、かくてそは跳ね返りつ。この武人は憤り給ひき。彼、投槍もて己れに傷與へにし傲れる海賊を刺し給ひけり。この武人は老巧なりき。彼は己が槍を、この若者の首に貫き入らしめ給ひき。——手、導きにけり——かくて彼、この敵の命を奪ひ給ひけり。

(II. 143-148.) やがて彼の一人を速かに射給ひければ、その(男の)胸甲は切れぎれに破れぬ。彼は胸甲を通して胸に傷を受けぬ。彼の心臓には毒つけたる切先突き立ちしなり。かの太守は彌々心晴れやかなりき、この勇士は笑ひて、彼に天帝の與へ給ひける其日の仕事に禮を申し給ひぬ。

(II. 149-158.) 時に「敵の」武士の一人は手より、掌より槍を飛ばしめぬ。さればそは放たれ行きて Eþelred の身分貴き上士を貫きぬ。彼の側には年端ゆかざる武士、戦に於ける從者立ちてありき。彼、Wulfstan の子、若き Wulfmer は、いち速くこの人より血に染みたる槍を引き抜きぬ。手厳しく(槍を)返りゆかしめぬ。切先は貫き入り、さきに彼の主君を激しく撃ちし者は地上に横たはりき。

(II. 159-172.) 馳て武具ぶぐに身をかためたる男、かの君の許へ進みぬ。彼はこの武人の頸飾、衣服や寶環及び(寶石を)鑲めたる劔を奪はむと思ひしなり。茲に於て *Byrhtnoth* は幅廣く鳶色の刃ある劔を鞘より引き抜きかの胸甲の上へ斬りつけぬ。餘りにも速かに船乗らの一人は此太守の腕を傷け、彼を妨げ、かくて黄色の柄ある劔は地に落ちぬ。彼は硬き劔を保ち、武器を揮ふこと能はざりき。而もなほ髮白き武人は次の言の葉を語りぬ。武士等を勵まし、雄々しき部下等に進み行けと命じぬ。この時もはや兩足の上かたにしかと立ち給ふこと能はざりしなり。天の方を眺め給ひぬ。――

(II. 173-180.) 「人々を統べ給ふ君(神)よ。我は、此世にて我が享けしあらゆるかの歡びに對し謝し奉る。慈悲深き神よ、今や我は、わが魂が君のみ許もとへ旅しゆき、天使達の主よ、君がみ國へ恙なく赴き得るやう、わが魂に幸さいちを賜はらむことを何にもまさりて求むるなり。我は、そを「魂を」惡魔らが苦しむる能はざらむことを君に祈願し奉る。」

(II. 181-197.) この時、邪宗の武士らは彼と、彼の傍に立てりし男ら双方を斬り倒しぬ。 *Aethnoth* と *Wulfmaer* とは殺されて横たはりぬ。彼等の主君によりそひて命をうち棄てしなり。爰に於て其處に居ることを望まざりし者共は戰より踵を返しぬ。其處にて *Odda* の子 *Godric* は戰より眞先に逃れ、而して彼に屢々幾頭となく馬を與へ給ひしかの善き人を見棄てしなり。彼は己が主君の所持し給ひけるその馬の馬具上に跳び乗りき、そは正しきことにはあらざりき。而して彼の兄弟ら *Godwine* と *Godwig* と

は孰れも彼と共に奔りぬ。戦を思はず、否戦より踵を回らしてかの森へ赴き、その砦へ逃れ込みて己が命を救ひぬ。而してもしも彼等が、彼等のために彼「Bythnos」がそれまでなし給ひたりし引立ての盡くを想ひしならば、いやしくも相應しかりしならむよりも多くの人々も（森へ逃れ込みて己が命を救ひしなり。）

(II. 198-201.) (こは)嘗て Otha が評定を行ひしとき、評定の席にて、後に緊急の時に當りては持ち堪ふることを望まざる多くの者らも、其處にては雄々しげに物言ふと曩さきに申しける通りなりけり。

(II. 202-208.) 今やかの民草の主、Eþelred の太守は倒れ給ひぬ。總ての家臣らは、彼等の主君の倒れ給ひしを見たり。茲に於てか心ある臣達、豪膽なる人々は進み出で、ひたすらに急ぎぬ。彼等總ては命を棄つるか慕はしき君の仇を報ゆるか、二つに一つを望みしなり。

(II. 209-224.) Ælfric の子、年若き武士は、次の如く彼等を勵まし進ましめ言葉もて語りぬ。 Ælfwine は茲に申しぬ、心きつと申しけり。——

「我等が屢々酒宴にて語りしかの言葉を想へ。その時我等武者つはものらは館やかたの中椅子の上にて、惡戦苦闘につき誇らかなる言葉を擧げしなりき。今や何人が勇あるかは試さるべし。我はわが家柄を凡ゆる者に知らしめむ。——我は Mercan [Mercians] の中の大いなる一族に生れ、わが老ひたる父は Ealhelm と呼ばれ、心賢にして、此世に榮えたる領主なりき。今やわが主君、戦に斬倒され横たはり給ひけるからに

は、我がこの戦いくさより故郷へ赴かむと望めりとして、かの國 [Mercia] にて上士等我を責むることなからしめむ。そは我に取りて痛手の最も大なるものなり。彼 [Byrhtnoth] は我が親族たりしと共に又我が主君に在は(註六)しき。」

(II. 225-229.) かくて彼は怨をふくみて進み出で、遂に彼はかの群の中なる一人の海賊を槍先もて撃ちければ、其者は彼の武器に殺されて地上に横たはりつ。茲に於て(彼は)朋輩、味方や仲間を勵まし始めぬ、されば彼等は進み出でけり。

(II. 230-243.) Otha は申しき、——しなの木の槍をうち振りぬ。——

「やよ、Elfwine, 汝は家臣らすべてを危急に際して勵ましぬ。今や我らが殿、領主の地上に横たはり給へるからには、我ら孰れも武器、硬き劔、槍とよき刀とを持ち握り得るかぎり、他の武士つはものを戦たたかひへ鼓舞すること我等凡てに肝要なり。Otha の卑劣なる一子、Godric は我等すべてを裏切りぬ。彼が馬、かの誇らかなる駒にうち跨り行きし時には、あまりにも多くの人々何れもそが我等の主君なりと思ひき。この故に此處、戰場にて軍勢は離散し楯の列は崩されけるなり。此處にて彼が斯くも多くの者を何れも奔らしめたる彼の所行に禍あれ！」

(II. 244-254.) Leofsunn は申しき、而してしなの木の楯を、禦まもぎに楯をさし擧げぬ、彼はこの人 [Otha] に向ひて申せしなり。——

「我は、我がここより一步たりとも逃るゝことを思はず、否いよゝ進みて闘ひにわが主君の仇を報ひむと望めることを誓ふものぞ。今やわが君斃れ給ひけるからには、われ主あまじなくして戦より踵を返し故郷へ赴くとて、心ゆるがざる武士ら Stunmere のほとりにて言葉もて我を咎むるの要なかるべし。否、武器、切先と鋼はがねに此身を奪はしめむ。」怒氣満々として彼は踏み出で、決然として戦ひぬ、逃ぐるを蔑みしなり。

(II. 255-259.) 時に老ひたる歩卒 Dunmere は申しぬ、——槍をうち振りつ 人々何れも Byrhtnoth の仇を報ひ奉りてむと凡ゆるものゝ上に叫び立て求めけり。——

「軍中にて殿の仇を報せむと思ふ者はつゆためらふべからず、又(己が)命を氣遣ふべからず。」

(II. 260-265.) かくて彼等は進み出で、命をもともせざりき。かの一族郎黨、猛る武者ら Hit. 「槍持つ人々」は激しく戦ひ始めぬ。而して、彼等が己の主君の仇を報じ、己が敵人らの中に潰滅を起し得むことを神に祈りき。

(II. 266-272.) かの人質(註七)は、彼等を一心に助け始めぬ。彼は Northymbre [Northumbrians] の中にて強豪なる一族の者にて、 Ecglaef の子なりき。彼の名は Eadeler なりき。彼はこの戦に些かも怯むことなく、否矢つぎ早に箭を送り出だし、或は楯の上を射、或は人を傷つけ、彼が武器を振ひ得し間ぢう、屢々若許そこばくの傷を與へぬ。

(II. 273-279.) 時になほ陣中には丈長たけながの Eadward, 身構へなし、心はやりて立てりき。彼は、己が主君の倒れ給ひしからには、土地の一步はだに逃れじ、背を向けまじとて誇らかなる言葉を申しき。彼はかの楯の壁〔列〕を破り、武士らと戦ひ、遂に己が主君〔E.〕「寶物を與へ給ふ君」の仇をか海賊共に華々しく報ひ、臆て己も屍の中に横たはりぬ。

(II. 280-285.) Sibryht の兄弟、身分高き朋輩、熱烈にして心はやれる Eþeric と、いとも數多あまたの他の者何れも斯の如くなし、一心不亂に戦ひぬ。彼等は中凹みたる楯を裂き、毅然として禦ぎぬ。楯の輪縁わづらは破裂し胸甲は恐怖の歌の一つを唱ひぬ。

(II. 285^b-294.) 時に Oþa は戦にて海賊を撃ちぬ。されば彼は地上に倒れつ。而して其處にて Gadda の血族〔Oþa〕も大地へ赴きぬ〔倒れぬ〕。Oþa は戦にて忽ち斬倒されしなり。然れども彼は、己が主君に誓ひしことを、曩に彼が寶環を與へ給ふ君〔主君〕に向ひて誇りし通り爲し遂げたりしなり。即ち彼等兩人は恙なく故郷、城市の中へ騎り入るか、然らずんば軍中に死なむ、殺戮の場にて創に倒れなむ、となりき。彼は上士に相應しく主君の側に横たはりけり。

(II. 295-300.) 茲に於て楯の破壊やぶれは起りぬ。海賊共は戦に心焦立ちて進みぬ。屢々槍は死期定まれる者の命いのちの館やかた〔身體（註十二）〕に貫き入りぬ。Purstan の子、Wistan は進み出で、それ等の男らと戦ひぬ。Wigelin の子〔Wistan〕は屍の中に横たはるよりさき、群集の中にて彼等の中三人を殺す者となりたりき。

(II. 301-308.) 其處には激しき合戦ありき。武士らは戦の中に毅然として立ちぬ。武士らは創に力衰へて倒れ、屍は地の上に落ちぬ。Oswold と Eadwold、かの兄弟兩人は終始人々を勵まし、己が血族の者らに、彼等が其處にて危急に當りて持ち堪へ、雄々しく武器を用ゆべしと言葉もて求めぬ。

(II. 309-319.) Byrhtwold は申しき、楯を握りぬ。彼は老ひたる家臣なりき、槍をうち振り、いとも雄々しく人々に訓へぬ。――

「我らの力衰ふるにつれて所存はいよ、固く、胸はいやましに雄々しく、勇氣はいやまさりて大いならざるべからず。此處に我等のよき主君は全く斬倒されて砂上に横たはり給ふ。今この戦闘たかひより去り行かむと思ふ者は、永久とこしへに嘆くことならむ。我は年老ひたり。逃れむことを我は思はず。否わが主君の傍に、かくも慕はしき御方の近くに斃れむところ思へ。」(註十三)

(II. 320-325.) 又 Eþelgar の子、Godric も同じく彼等すべてを戦へと勵ましぬ。屢々彼は投槍、殺人の槍をか海賊ら目がけて飛ばしめつ。かくして彼は軍中にて真先に進み、斬り又倒し、やがて彼も戦の中に斃れぬ。そはこの戦より逃れしかの Godric にてはあらざりしなり。……

* * *

(註一) 此詩は、前節に述べた如く頭初と終りとが缺けてゐる (Wanley からの引用文参照)。此行は後半が残つて居るばかりで、原文、"brocen wurde" の主語は分らない。

(註二) “Ofan mæg.” 名は不明。

(註三) Anglo-Saxon 人が鷹狩をしたことに就ては、詩に屢々出てゐる。例へば *Beowulf*, ll. 2263-2264; *Gnomie Verses* (MS. Cotton), ll. 17-18; *Be nornna vryrdum*, l. 86. 海賊らの襲つて來た時 *Byrhtnoð* 自身は鷹狩をしてゐたものとも解される (Körner, *loc. cit.*)。

(註四) *Byrhtnoð* の軍勢と海賊とは *Pante* 河 (今日の Blackwater 河。cf. l. 68: ‘Pantian stream’; l. 97) を隠して驚嚇してゐたのである。

(註五) 此部分の原文 (ll. 60-61) は第四節 (三五頁) 参照。

(註六) ‘Gehyrde ic’ 「我聞けり」といふ句は、ゲルマン語の古詩にもつては詩吟的なものである。Anglo-Saxon では ‘Mine gefrege’ (*Beowulf*, 776, 837, 1955, 2685, 2837), Old High German では ‘ik gihorta kat seggen’ (*Hilibrantsied*, 1), Old Norse では ‘heyðak segga’ (*Ólaf-vísur-grafr*, 1) など、其他此意味の言ひ廻りは多い。

(註七) ‘súberne gar.’ 文字通りには「南方の槍」。「南から投げた槍」の意に解する説もある (Sedgefield)。然し筆者は「南國 (フランス乃至イタリヤ) 渡來」の意とする。紀元八七二年の Hofsford の戦を叙した古代 Norway の詩 *The Battle of Hofsford*, st. 2 に次の句がある。——

Hlaðnir váru hölka ok hvíta skjaldar,

vigra vestroenna þak Valskra sverða.

(それら「船」は武士らと白き楯、西方渡來の槍とフランス渡來の劍が積まれてあつた。) N. Kershaw, *Anglo-Saxon and Norse*

Poems, Cambridge, 1922, p. 90.

(註八) 原文 (ll. 212-224) は第四節 (三九—四〇頁) 参照。

(註九) 原文 (ll. 246-253) は第四節 (四〇頁) 参照。

(註十) 'Gysel.' 人質となつた者が、自分を人質に取つてゐる者のために戦ふことは、又 *Anglo-Saxon Chronicle*, 七十五年の項にもある。「たゞ一人 Brit-Welsh の人質以外、彼等みな倒れたりき、而してそれも甚しく傷きつありき。」 *hig ealle ofslagene wæron .buton anum Brytwyliscum gisle.* MS. E. ed. Earle-Plummer, I, p. 49)° *Waldhere* の *Hagena* の語 (*Waltharius*; *Waldhere*) の *Waldhere* の *Waldhere* (H. M. Chadwick, *The Heroic Age*, Cambridge, 1926, p. 351)°

(註十一) 'Eadweard se langa.' の綽名は 'l. 117 ° Eadweard とは別人を指すものと思ふ。

(註十二) 「段戮の床を擇むき」 ('*wælræste gecéas*' : l. 113) ; 「金の館」 ('*feorhús*' : l. 297)° 海の *Waldere* 「鯨の路」 ('*thronrád*') と云ひ、牡鹿を表はすのに「荒野の濶歩者」 ('*threástapa*') と云ひ、この種の詩語を 'kenning' と云ひ、*Waldere* の古詩に多い。「段戮の床を擇むき」は戦ひ「變れた」の意。 *Beowulf*, l. 2902 には '*wunat wælræste*' 「段害の床を占め給ふ」といふ句がある。拙稿 '*Kenningar in Beowulf*' (*English Literature and Philology*, Vol. I [1930], pp. 1-8) 参照。

(註十三) 原文 (ll. 312-319) は、第四節 (四〇一—四一頁) 参照。

(註十四) 第一節註十一 (九頁) 参照。

四

Maldon の戦の後、*Aethelred* 王は、*Canterbury* の大僧正 *Sigeric* の提案によつて、*Olaf Tryggvason* に二萬二千ポンドの貢を支拂つて和を請ふた (前節二参照)。

古代の *Germania* 人にとっては、敵に貢を支拂つて和を求めるといふことは實に堪へ難い屈辱であつた。Maldon の戦よりおよそ九百年の昔、*Tacitus* は、貢を支拂ふことは *Germania* 人の

でない證據であるとも考へてゐる (*Germania*, 43)。Cotini 族はゴオル語を使ひ、Osi 族はパンノニア語を使ふ。彼等の言語によつて彼等がゲルマニア人でないことが分る。然し又彼等は Sarmatae 族や Quadi 族の課した貢を甘んじて拂つてゐる。このことも彼等がゲルマニア人に非ずといふことを示してゐる、——といふのである。Cotinos Gallica, Osos Pannonica lingua coarguit non esse Germanos, et quod tributa patuntur (ゴオル語は Cotini [族] の、パンノニア語は Osi [族] の Germani にあらざることを示してゐる。そして「彼等が」進貢の義務を忍んでゐることも「これを示してゐる」)。Tacitus がゴオル人を輕蔑し、ゲルマニア人を高く評價してゐたことは彼の書物の方々に表はれてゐる。右の一節もその一つの表はれであると思はれる。然し事實ゲルマニア人は敵に貢を拂ふことを非常に屈辱と感じ、貢を支拂ふよりは寧ろ自己よりも強い敵に向ふに廻して戦ふことを望んだといふことを示す例がある。イタリア北部の Langobardi の出なる Paulus Diaconus (ca. 725-799) が『ロンバルド史』 *Historia Langobardorum*, I, 7 で語る所によれば、Langobardi の君主 Ibor と Agjo とは、彼等よりも強力な Vandali のために惱まされた擧句、「武器を以て自由を維持する方が、貢の支拂ひによつてそれを汚辱するよりも好まじである」 ('Melius esse armis libertatem tueri quam tributorum eandem solutione foedare') といふ決斷に到達した、といふ^(註1)。

(註1) Rudolf Much, *Die Germania des Tacitus* (*Germanische Bibliothek*, I. Abt.), Heidelberg, 1937, S. 376.

Maldon の戦に於て、海賊の使者が平和と引換へに黄金の貢を要求した時、白髪の *Byrhtnoð* は槍をしごき、怒氣満々として答へた。——「我等貢を拂はむより前に槍先と刃、烈しき戦先づ我等が仲を治めたるべからず。」

ús sceal ord and ecg ær geseman

grim guðplega, ær wé gafol syllo.

——*The Battle of Maldon*, II. 60, 61.

かくて戦の幕は切つて落されたのであつた。ここに我々は、*Germania* 古來の精神が烈々たる氣を吐いてゐるのを感じる。

激戦のうち *Byrhtnoð* は海賊の投槍に一度二度と深傷を負ひ、遂に數人の敵の刃を受けて倒れた。隊長の倒れたのを見た *Odda* の子 *Godric* は眞先に、繋いであつた主君の馬に跳び乗り、その兄弟 *Godwine* や *Godwig* らと共に戰場より踵を返して逃れた。然し心ある部下らは一步たりとも退かうとはしなかつた。「彼等總ては命を棄つるか慕はしき君の仇を報ゆるか、二つに一つを望みしなり。」

hí woldon þá ealle oðer twega,

líf forlætan oððe leofne gewrecan.

——II. 207, 208.

Tacitus は *Germania*, 14 に於て次の様に述べてゐる。——「戦列へ臨んだ時には、隊長にとつて勇敢さに於て凌がれることは恥づべきであり、部下にとつて隊長の勇敢さに匹敵しないことは恥づべきである。のみならず、己が隊長よりも生き延びて、戦列より退いたといふに到つては實に終生の不名譽であり、且又恥辱である。彼〔隊長〕を護り、助け、又自ら自身の立派な手柄を彼の榮譽に歸屬せしむることは忠義の最なるもの [Lit. 主要な忠義の誓] である。隊長らは勝利のために戦ひ、部下らは隊長の爲に戦ふ。」(Cum ventum in aciem, turpe principi virtute vinci, turpe comitatu virtutem principis non adaequare. iam vero infame in omnem vitam ac probrosum superstitem principi suo ex acie recessisse : illum defendere, tueri, sua quoque fortia facta gloriae eius assignare praecipuum sacramentum est : principes pro victoria pugnant, comites pro principe.)

(註1) Much のキヌトに據る (S. 159)。臣下が主君と其運を共にすることが彼等の義務であり、これを破ることは非常に恥づべきことと考へられた。『ロキヤ帝國史』を書いた Ammianus Marcellinus (ca. 330-400) は彼の同時代の敘述が殊に正確とされてゐるが、彼の語る所によれば (XVI, 12, 60) ショトラメンブルグの戦ひ Julianus は Alamanni (ゲルマニア人) を敗つた。敗れた王 Chnodomarius はロキヤに降り、捕虜となつた。茲に於て、二百名を算する彼の臣下と三名の最も親密な友人等は王に倣つて自ら捕虜になつた」といふ。comites... flagitium arbitrati post regem vivere, vel pro rege non mori, si ita tulit casus, tradidere se vinciendos. (従者らは、「彼等が」王の後に生存することや、或は又事態がその様に「王のために死する様」要求する場合王のために死なざることは、恥づべき行ひと考へたので、囚虜として自らを引渡してしまつた。) (R. Much,

Die Germania des Tacitus, S. 161. に引用されたものに據る。）

この精神は傳へられて八世紀前半の作とされる Anglo-Saxon の敘事詩 *Beowulf* にも現はれてゐる。
Geatas の王 *Beowulf* は國土を荒す火龍を退治せむとて、十一人の部下と共に龍の洞窟へ到着した。激怒した龍の姿のあまりの恐ろしさに、部下等は主君を見棄て、森の中へ逃げ込んだ。たゞ一人 *Wiglaf* のみは、主君が單身危難に曝されてゐるのを見て大いに恥ぢ、直ちに戻つて主君と力を併せ、遂に火龍を斃した。然し龍の吐く毒氣に當つた *Beowulf* も應て息絶えてしまった。*Wiglaf* は、逃亡して己が生命を全うした者らを責めた擧句、かう言つた。——「貴人等遠くより汝等の逃亡、不名譽なる行を聞きてよりは、その一族の人々何れも土地の權を奪はれて彷徨^{さまよ}はざるべからざるなり。武士等の何れに取りても恥の生よりは寧ろ死の方よきなり。」

londrihtes mót

þære mægburge monna eghwyle

ídel hweorfan, sýððan eðelingas

feorran gefricgean Héarn éowerne,

dónléasan dáad. Déað bið sélla

eorla gehwylcum þonne edwítlíf.

「モオレンマンの戦」の歌（厨川）

（五六五）

六七

——*Beowulf*, II. 2886^b-2890. (註三)

不忠の汚名を着て生き延びる位なら死んだ方がましだ、といふのである。この *comitatus* の精神が、當時のイギリス人の心に脈々として生きて居り、この精神を表はした文學が彼等の魂に深い共感を惹き起したことは明かである。キリスト教宣教師が England へ渡つて來てキリストとその十二使徒とを説いた時、Anglo-Saxon 人の心を最も強く捉へたものは、キリストと使徒との關係が、彼等の隊長と部下との關係に似てゐるといふことであつた。キリストはその愛のために殉難し、使徒らはキリストの爲に殉難する。類似は明白である。(註四)キリスト教に題材を採つた Anglo-Saxon の詩に、キリストを 'Péoden' (主君) とし使徒を 'Pegnas' (臣下) として表はした例は極めて多いが、中には *Andreas*, II. 405 ff. の如く *comitatus* の精神までも表はさうとした場合がある。(註五)この様な現象が OE. Christian poetry に見られたといふことは、之等の詩の作られた時代の Anglo-Saxon 人が、*comitatus* の精神に深い共感を感じたからに他ほかならない。

(註三) F. Kuriyagawa, *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, pp. 195 f.

(註四) *Germania*, 14 よりの引用文 (三六頁) 参照。

(註五) OE. Christian poetry に現はれた *comitatus* の精神に就ては、拙稿『古代英詩に關する一考察』(日本文學會編「英文學研究」第十五卷第二、pp. 173-182) 参照。

Maldon の戦に、逃亡した Godric を罵り、主君の仇を報ひむと互に勵ましつゝ、一步も退かず、一人

一人斃れて行つた武士らの叫びの中には、彼等の遠き祖先の氣魄がそのままに迸つてゐるのである。その例としてこの若き武士 *Ælfwine* の言葉 (ll. 212 ff.)、*Leofsunu* の言葉 (ll. 246 ff.)、*Byrhtwold* の言葉 (ll. 312 ff.) を原文で引用する。——

“*Gemunnad̄ þá mæla, þe wé oft æt meodo spræcon,*

þonne wé on bence, beot áhófon,

hæled̄ on healle, ymbe heard gewinn ;

nú mæg cunnian hwá céne sý.

Ic wylle míne æþelo eallum gecýþan,

þæt ic wæs on Myrcon miccles cytnes ;

wæs mín ealda fæder Balhelm hátan,

wás ealdorman, woruldgesélig.

Ne sceolon mé on þære þeode þegenas ætwítan,

þæt ic of ðisse fyrde féran wille,

eard gesécan, nú mín ealdor liged̄

forhæwen æt hilde ; mé is þæt hearma mæst ;

hé waes ægðer mín mæg and mín hláford’;

—II. 212-224.

*

*

*

‘‘Ic þæt geháte, þæt ic heonon nelle

fléon fótes trym, ac wille furðor gán,

wrecan on gewinne múnne winedrihten.

Ne þurfon mé embe Stúrmere stedfæste hæleað

wordum setwítan, nú mín wine gearanc,

þæt ic hláfordléas hámsíðie,

wende fram wíge; ac mé sceal wápen niman,

ord and íren.’’

—II. 246-253.

*

*

*

‘‘Hige sceal þe heardra, heorte þe cenre,

mód sceal þe náre, þe úre mægen lýtlað.’’

Hér líſ tŕe ealdor call forhéawen,

gód on gréote ; á mæg gnornian

sé ƿe nú fram þís wíglegan wendan þenceſ.

Ic eom fród féores ; fram ic ne wille,

ac ic mé be healfe mínum hláforde,

be swá léofan men, liegan þence.”

—ll. 312-319.

* * *

Maldon の戦で勝利を得たのは Norway 軍であつた。然しこの戦によつて、イギリス人が Ethelred 王の時代に於てもなほ、若し古への精神を傳へた武將が陣頭に立つて指揮をすれば、どの程度に精悍な Northmen に對抗し得るか、明かに示されたのである。けれども又、この戦にイギリス軍には Godric 兄弟の如き卑劣な逃亡をなすものもあつた。不幸にして、今や Ethelred 王の政策を支配したものは、Byrhtnoſ の部類に屬する人物ではなくて、Godric らと類を同じうする人間であつた。かの老ひてなほ意氣凛々たる Byrhtnoſ は貢を支拂つて海賊に和を請ふことを怫然として拒絶した。所が未だ年若うして血氣盛なるべき Ethelred 王やその顧問官らに取つては、これが採るべき唯一の手段と考へられたの

である。Byrhtnothとその忠烈な部下らが此世を去つた紀元九九一年はまた、イギリス王が海賊に「最初の貢」^(註六)を捧げて和を求めた年であつた。貢を取つた海賊らは一時は退いて和を守るが、やがて又押し寄せて掠奪を恣にする。九九一年以降の年代記を繙けば、戦つては敗走し、敗れては貢を支拂ひ、甚だしきに到つては戦はずして逃亡し、敗れずして貢で和を請ふ悲惨なイングランドの姿が次々に現はれて来る。「屢々戦に際し一人(のデイン人)よく十人(のイギリス人)を敗走せしむることあり」といひ、「我等は常に彼等に支拂ひをなし、彼等は日々我等に辱しめを與ふ。彼等は破壊し、焼き、掠奪し、押收して船へ運ぶ」と言つたあの十一世紀初頭の York 大僧正 Wulfstan の言葉は何等の誇張をも含んで居ない。イギリス人の魂に傳へられた Germania の傳統的英雄精神は、九九一年 Maldon の戦に最後の光輝を放つたまゝ、彗星のごとく消え失せたのである。

(註六) "ærest gafol" (*Ang. Sax. Chron. MS. E.*; 第二節 [一二頁]) に引用した anno 991 の項の全文を参照。

(註七) 第一節の引用文(七頁)参照。